

令和6年度 府中市立本宿小学校学校経営報告

令和7年3月31日

校長 藤咲 孝臣

(教育目標)

心身ともに健康で、知性と感性にとみ、自ら学ぶ実践力をもちグローバルに活躍する人間性豊かな児童「輝きのある子」の育成を目指す。

- 自分の考えをもち、やりぬく子供 → あきらめない心、折れない心を育む（粘り強さ）
自ら主体的に考え、課題意識をもち、問題を粘り強く解決していく能力や態度を育成する。
- 豊かな心をもち、仲良く助け合う子供 → 自他の理解と尊重する心を育む（他者意識）
人権を尊重し、公共の精神を尊び、お互いを認め励まし合う温かな心や他人を思いやる心を育成する。
- 健康安全に気を付け、体をきたえる子供 → 丈夫な体から丈夫な心を育む（健康な心身）
自他の生命を尊重し、自ら健康を保ち、体力づくりに取り組む態度と実践力を育成する。

1 目指す学校像

創立54年を迎える本校の歴史と伝統を受け継ぎながら、ふるさと府中に誇りをもち、世界に活躍する府中っ子を育てる。保護者、地域の信頼に応え、教育目標である「輝きのある子」の育成を目指す。

(目指す学校)

◎子供たち一人一人に勇気や希望を与え、挑戦する意欲、よさや可能性を引き出す学校

(1) 子供が第一の学校づくり … 学校が楽しい、明日も来たくなる学校

- ① 安心、安全な学校。 → 良好な環境・良好な集団・良好な人間関係からの安心感
- ② 心の温かい学校。 → 挨拶、返事の定着の徹底 他者理解と人権尊感受の育成
- ③ 一人一人のよさや可能性を引き出す学校。 → グローバルに活躍できる力の育成
- ④ たくましく自立を目指す学校。 → 心身を鍛える 体力の向上

(2) 教職員が、学び合い磨き合う学校づくり … 「チーム本宿」として教職員も輝く学校

- ① 教職員一人一人が自覚をもつ（社会人、教育公務員として） → 服務事故ゼロ
- ② 教職員が互いに協働する。（組織として 意図的計画的に） → 授業交換合同授業
- ③ 教職員が互いに磨き合う。（自己研鑽 研究と修養に努める） → 研修と研究

(3) 保護者・地域と協力・連携する学校づくり … 責任と信頼を基に、学校・保護者・地域が連携して、共に子供を育てる「共育」の推進

- ① 保護者・地域に広がる。 → 開かれた学校づくり
- ② 保護者・地域から学ぶ。 → 地域環境、地域人材の活用
- ③ 保護者・地域とつながる。 → 地域行事、学校行事への参加

2 今年度の取り組みと自己評価

(1) 教育活動の目標と自己評価

① 児童の学力の定着、向上を図る。

- ・授業のねらいを明確にした指導計画を実践するとともに、実施時期や指導内容、指導形態を工夫し、授業の充実を図った。
- ・毎時間のねらいを明確にし、児童が達成感を味わえる「分かる授業・楽しい授業」を行った。特に、「本宿スタイル」として各教科で問題解決学習を推進し、主体的・対話的に学ぶ意欲や達成感を高めるために、授業観察での指導や校内研究・研修を通して教員の授業力向上に努めた。
- ・タブレット端末や大型 TV など ICT 機器を効果的に活用し、教科の特性や授業のねらいに沿った活用を行った。意見交流や意見集約、資料収集、作品制作、プレゼンテーション、学びの記録などで計画的に活用した。個人で、児童同士がかかわり合う中で、全体の中で活用し、学び合い高め合うこと授業の実現と個別最適化の学びにつなげた。
- ・学習規律（授業規律、持ち物、ノート指導等）を指導した。また、話し方や聞き方の指導とともに手を挙げて、指名されたら「はい」と返事をし、立って答え、「です。」で終わる、「はい」「立つ」「です」の徹底の指導を全校で取り組んだ。
- ・外国語専科教員とALTや担任教師との連携を強化し、「外国語」「外国語活動」の授業を充実させるとともに、「世界につながる英語 Enjoy Week」の取組として英語を母国語とする外国人と関わる機会をつくり、学校生活の様々な場面で英語を活用した交流を実施した。また、5年生はTGGの英語体験学習にも取り組んだ。児童は積極的に英語による表現にチャレンジし、外国人と交流し、コミュニケーションの力を高めることができた。
- ・専門性の高い授業の提供と児童理解の深化のために、各学年が工夫して交換授業や学年内交流授業を日常的に実施し、担任以外の教員から学ぶ機会を日常的に設定した。学年内で児童と教員の関係が密になり、児童理解にも役立てることができた。また、教材研究の充実を図ることができた。
- ・学習において異学年が交流する機会を学期に一回以上設定した。調べ学習の成果を発信したり、交流会などで一緒に活動したりすることを通して、学び合い高め合う学習を実現するとともに異学年での良好な人間関係をつくることができた。

② 教師の資質能力の向上を図る。

- ・自己申告面接を活用し、目標の設定、研修計画の共有、進捗状況や成果・課題の振り返りを、PDCA サイクルに則って行い、教育活動への取組の明確化を図ることができた。
- ・経験の浅い教員を中心に、校長・副校長が短時間の授業観察を日常的に実施し、喫緊の課題解決につながるような指導助言を行い、授業改善につなげた。
- ・校内研究で「分かる・できる・活かす授業を目指して ～説明的文章の指導法の向上を目指して～」というテーマで授業研究に取り組み、教師の授業力の向上を目指した。昨年と同じ国語教育専門の大学教員を年間講師として招き、一年間継続的に指導を受けた。国語科の教科の特性や教材研究の方策など、説明的文章の指導法のみならず国語科の指導法全般にわたり学ぶことができ、研究授業などを通して児童の指導に反映

することができた。

- ・主幹教諭の管理のもと校内の OJT 担当の教員が中心となって教員研修の機会をつくり、主任教諭が指導者となって希望者参加型のミニ研修会を複数回実施し、教員個々の困り感やニーズに沿った学びの場を設け、日々の指導に生かすための学びの機会を設けた。毎回、ほぼ全教員が参加し学び合い、高め合うことができた。
- ・今年度も農業ボランティアの方に協力を仰ぎ、年間を通して栽培活動の指導やキャリア教育に関わる指導など教育活動に参画していただき、地域連携の充実を図ることができた。
- ・ヤギの飼育について、東京農工大学や近隣企業、近隣小学校と連携し、サポート体制を充実させた。
- ・全教員が週の指導計画作成及び提出を行い、学年揃えて管理職に提出させることで、学年による教育課程の管理からカリキュラムマネジメントの意識を高めることができた。また、管理職が教育課程の適正な進行を定期的に確認することができた。
- ・体罰防止、個人情報管理、都が示す重点項目について教員の意識向上を図るため、3回のサービス事故防止研修に加え、毎週の打ち合わせや月一回の職員会議を活用したサービス事故防止研修や情報提供を行った。教員の意識向上を図り、サービス事故ゼロを実現している。

④ いじめの未然防止と安全安心に関わる指導の推進を図る。

- ・府中市いじめ防止対策推進条例及びいじめ防止対策基本方針に基づき、本宿小学校いじめ防止対策委員会を設置して組織的計画的に児童の課題を共有し、いじめにつながる可能性のある課題の早期発見や未然防止など、全教職員で協力した指導や対応を実施できた。また、職員夕会などの打ち合わせ時に全教員で情報共有するとともに、教育委員会との連携も密に行った。
- ・年間3回実施の「いじめアンケート」や毎月一回実施の ICT 活用による「心の天気」、毎学期複数回実施の「いじめ防止授業」などを活用して児童の実態把握に努め、未然防止、早期解決を図った。その他、日常的な児童観察、児童理解に努め、情報交換を密に行った。
- ・毎月一回の避難訓練を通して、火災や地震発生時の避難行動を繰り返し指導し、児童は自助・共助の意識をもち自覚して行動できるようになった。より実効性のある避難訓練を実施して児童の安全への意識を高めるために、次年度に向けて避難訓練の内容等の見直しを測っている。
- ・アレルギー対応シミュレーションを毎学期初めに実施し、教員間での対応手順の確認の徹底を行った。また、児童のアレルギー反応についての確実な情報提供を保護者と行い、食物アレルギー対応を確実にを行った。

⑤ 不登校の防止に努めるとともに、不登校児童、家庭への対応を充実させ、不登校児童の再登校を図る。

- ・教室に行けない児童や不登校傾向の児童を保護者との連携のもとでサポートルームに誘導し、居場所として有効に活用することができた。
- ・管理職、学級担任、サポートルーム担当支援員が連携を図り、ICTなども活用して不登校傾向の児童に対して個別に指導支援を行った。不登校傾向の児童の登校回数の増加

や不登校の解消につなげた。

- ・校内委員会で不登校傾向児童の情報交換を定期的に行い、スクールカウンセラーとも連携しながら対応の確認を行い、支援の充実を図ることができた。
- ⑥ 特別支援教育等、個別に配慮を必要とする児童への指導を充実させる。
- ・特別支援教室担当教員と担任が連携して作成した連携型個別指導計画に基づいて指導支援を行い、計画的な指導を実施した。
 - ・個別に配慮が必要な児童へは、学校支援員の個別指導、巡回指導、スクールカウンセラー、特別支援教室等の階層的な支援を実施した。
 - ・保護者や関係機関（巡回相談チーム、民生児童委員、府中市子育て世代包括支援センターみらい、児童相談所、スクールソーシャルワーカー）との連絡を密にし、児童一人一人の状況把握に努め、家庭の課題への対応や児童虐待の予防に努めた。
- ⑥ 基本的な生活習慣を定着させるとともに、他者への優しさ、思いやりを育成する。
- ・本校の合言葉である3つの「あ」（あいさつ、あんぜん、あとしまつ）を指導し、規範意識の向上と自他を尊重する心を育成した。
 - ・学期に1回、生活月目標にあいさつを掲げ、重点的にあいさつ指導を行った。また、運営代表委員会が中心となってあいさつ運動を定期的に行い、全校への働きかけを行い、あいさつを通して豊かな人間関係づくりを行った。保護者アンケートでは、「学校は挨拶や社会のルールを適切に指導している。」について、肯定的評価は89.6%であり、昨年と同率であった。
 - ・副籍交流活動として学期に1回、特別支援学校児童を迎え、該当学年や学級の中で行事や学習で交流を行った。また、運動会や学習発表会など学校行事での交流を行った。また、卒業スポーツ大会で交流を行い、双方の小学校最後の交流の思い出をつくった。
 - ・月一回のたてわり班活動、たてわりオリエンテーリングやたてわりお別れ弁当給食など、たてわり活動による異学年交流を推進した。児童間の年齢を超えた豊かな関わりの中で思いやりの心を育むとともに、自他を尊重する心や自己有用感を高めることができ、高学年児童にとっては大きな自信につながった。
 - ・農園活動やスポーツ体験、福祉体験、消防団やお囃子などの見学や体験活動を各学年で実施した。それらの活動を通して、社会性を身に付けるとともに、地域への愛着や自然への感謝や畏怖の心、働くことの意味や社会貢献の大切さを育んだ。
- ⑦ 体力の向上を図る。
- ・体育向上委員会のメンバーが中心となり、年間を通して運動週間を設定し、児童の体力向上を目指した。短なわ週間やロープチャレンジにつなげる長なわ週間、持久走週間を実施した。朝や休み時間など、個人や学級で積極的に取り組む姿が見られた。全校で体力向上に努めることができた。
 - ・外遊びについては個人差や学級差が大きく、全校でも学年や学級でも児童への働きかけが必要である。
- ⑧ 未来へつなぐ府中2020レガシー教育の取り組みを充実させる。
- ・グローバルに活躍できる子供を育てるために、1学期に「世界とつながる英語 Enjoy Week」、2学期に「国際交流・国際理解 Week」、3学期に「日本語・日本文化 Week」を設定し、学校や学年で共通の取組をしたり、ゲストティーチャーを招いて学ぶ機会

をつくったりした。3学期には、ゲストティーチャーの招聘により多彩な伝統芸能を学ぶ機会をつくることができ、児童の興味や関心を高めることができた。

- ・ウィーン市ヘルナルス区のクンタブント・ハリルシュガッセ小学校と作品交流やメールによる交流を行い、外国の文化への理解を深めることができた。

⑧ コミュニティスクールの推進

- ・地域と連携した体験学習である「ふるさと学習」を、1学年1取組で実践した。お囃子、お祭り、農業体験など「ふるさと学習」の取り組みにより、地域について児童が深く学び、地域の一員としての自覚、地域を愛する心情を育てた。また、地域連携コーディネーターが中心となり、本宿小サポーターズクラブやJA関係者、地域協力者等の協力を得て、水田・農園活動を推進した。
- ・日々の学習の成果、児童の様子、教育活動の紹介などを学校便りやホームページ、校内写真掲示等で日常的に保護者や地域に発信した。
- ・図書やヤギボランティアの方々など、教育支援ボランティアの力を教育活動に生かした。また、ヤギ飼育について、近隣企業や市内小学校と協力体制をつくり始めた。
- ・地域の自治会主催の防災訓練や青少対第4地区、第十地区の活動に児童や教員が参加することで、地域とともに子供を育てることの実践につなげた。

⑨ 小中連携の推進

- ・連携校三校がそれぞれの学校を訪問して授業参観と情報交換などを実施した。小中連携コーディネーターが計画的に準備を進め、分科会単位で3校が話し合いを活発に進め、各校の実践について協議を行い、交流を深めることができた。
- ・小中連携の日の授業の中で、三校の教員がTTの形で授業に入るなど教員が連携して授業実践を行い、児童の指導の充実を図ることができた。
- ・中学校の音楽担当教員が6年生に合唱の出張授業を行い、専門性の高い指導を受けることができた。また、中学校進学に向けて、小中学校の教員が交流し情報交換を実施した。

(2) 重点目標への取り組みと自己評価

① 学校が楽しいといえる児童が90%以上

児童のアンケートでは、91%目標は達成したものの、昨年度より3ポイント減となった。6年生の96%から3年生の86%と、学年によって最大10ポイントの差が見られた。児童にとって「楽しい学校」とはどのような学校なのか、今後、児童の思いや願いなどをさらに詳しくリサーチし、学校生活における児童の安心感や満足感を高めていく方策を全教員で考えていきたい。また、教員の授業力の向上を目指し、「分かる授業・楽しい授業」実現する。さらに、複数存在する不登校傾向の児童や教室での集団生活に馴染めない児童に対しては、サポートルームの運営のさらなる充実など児童一人一人の実情に応じた支援を行うことで、どの子も学校で楽しく学び過ごせる場をつくり、魅力ある学校づくりをすすめる。

② 漢字・計算の定着率90%以上

2学期末の学習状況調査では、漢字の定着率が1・2・3年で89%(昨年度比5ポイント↓)、4・5・6年で87%(前年度同数値)であった。計算の定着率が、1・

2・3年で94%（前年度比6%↓）、4・5・6年で75%（前年度比3%↓）であった。この結果は、上学年、下学年それぞれの平均値であり、学年や学級によっては目標を達成できているものもある。

漢字や計算など基礎学力を定着や向上させるためには、繰り返しかつ粘り強く学習に取り組むことが大切である。児童の学力や学習状況に応じて習熟度別の指導やスモールステップなど児童一人一人に応じた指導支援をしていく。また、家庭学習の課題として、家庭と連携して学力の定着を図るなど、様々な方策により基礎学力の定着と向上を図る。

③ 家庭で学習する習慣（学年×10分）が身に付いている児童80%以上

保護者アンケートでは78%（昨年度比7ポイント↑）であった。児童アンケートでは60%（昨年度比10ポイント↓）で、目標を下回った。各学年で宿題などの課題を日常的に課しており、家庭で机に向かっている時間は決して短くはないはずである。また、自身の興味や関心をもとに自主学習などに取り組んでいる児童もいる。改めて、家庭でどんな勉強をどのようにしているか児童の実態をリサーチし、その上で児童自身や家庭に対して家庭学習の大切さについて周知していきたい。木曾学力の定着を図ることや学ぶ楽しさを見出すことなど、家庭学習の目的や良さを児童や保護者に伝え、「家庭学習スタンダード」も活用しながら家庭に働きかけていく。

④ 友達に優しくしようと心がけている児童90%以上

児童アンケートでは98%（昨年度比1ポイント↑）で、目標を達成できた。教育活動の中で学年内の交流や異学年交流、たてわり活動などを多く取り入れ、色々な仲間とのかかわり合いを通して、教育目標「豊かな心をもち仲良く助け合う子ども」の実現を図ってきた。その成果が表れていると考える。引き続き、「あいさつ」「ありがとう」「ごめんね」の言葉を大切にしていって温かい人間関係づくりに取り組んでいく。

⑤ すすんであいさつする児童90%

保護者アンケートでは90%（前年度同数値）だったが、児童アンケートは86%（前年度同数値）で目標の達成には至らなかった。

「いつでも・どこでも・誰とでも・自分からすすんで」挨拶できる児童の育成を目指しており、昨年同様に運営代表委員会が「あいさつ運動」を実施するなどあいさつを全校に働きかける機会もつくり働きかけてきたが、児童一人一人の意識向上に十分ではなかった。次年度は、学校だけでなく家庭や地域とさらに連携して、あいさつの意識化をさらに高めていきたい。今年度実現できなかった家庭や地域と連携した「あいさつ運動」を実施し、あいさつの習慣化・日常化を徹底する。あいさつを通して地域の中の豊かな人間関係づくりや防犯にもつなげていく。

⑥ 外で元気に遊ぶ児童90%

児童アンケートでは63%（前年比5ポイント↑）で、少し改善はしたものの、今年度も目標を大きく下回っている。休み時間は校庭で元気いっぱい過ごす児童が多くいるものの、教室内で過ごす児童も少なくない。週一回のクラス遊びも含め外遊びを推奨しているが、日常的に学年差や個人差が大きい。学校全体としても学年・学級としても、児童へのさらなる働きかけが必要であると考えられる。外遊びを通して心身の健康の向上と良好な人間関係の育成を図るとともに、社会性を身に付けさせたいと考

える。

⑦ 学校のきまりを守って生活する児童 90%

児童アンケートでは93%（前年比2ポイント↓）で、目標を達成できた。児童の大半には決まりを守って生活しようとする意識が見られ、規範意識も定着しているようである。しかし、児童の実態として、登校時刻が遅かったり休み時間が終わってもすぐに入室できなかつたりするなどの課題も児童の一部には見られる。また、放課後等、学校外での生活にも課題が見られる。来年度も児童に対してきめ細やかな働きかけを継続して行うとともに、家庭と連携を密にとり、児童の規範意識を育んでいく。

⑧ 自分の安全を自分で守ろうと心がけている児童 90%

保護者アンケートでは95%（昨年度比4ポイント↑）、児童アンケートでも94%（前年度同数値）で、今年度も目標を達成できた。今年度、教員研修で安全教育の専門家を招いて講義を受けるなど教職員の指導力の向上を図った。また、避難訓練の持ち方を工夫するなど、実践的でより実効性のある安全指導を実施することで、児童の安全についての意識の向上を図るようにした。児童一人一人が、事件や事故、災害などからの自分の身を守るために、安全に関わる指導を日常的に繰り返し指導することで安全への意識の向上を図り、「自分の身は自分で守る」という安全への主体性をさらに育んでいく。

3 次年度以降の課題と対応策

(1) 児童の学力の向上を図る。

- ① 分かる授業楽しい授業の実現を目指し、ねらいを明確にした授業の徹底及び、友達との交流により児童同士が高め合う授業、府中市グランドデザインの4つの視点を明確に位置づけた授業の推進、問題解決型学習の充実と本校で実践してきた本宿スタイル「学び合いのある授業」の徹底を図り、全教員が全ての授業で実践していく。
- ② 中高学年では、できる範囲で学年内の交換授業を定期的実施し教科担任制に近付けることで、専門性を生かした指導や教科研究の深化を通して授業の質を上げ、児童の学習への興味関心や意欲を高めるとともに学力の定着や向上につなげる。
- ③ デジタル教科書やタブレット端末などICT機器をさらに効果的に活用し、児童の主体的な学びを充実させる。また、ICT機器活用の下で指導支援体制を工夫し、個に応じた指導の充実を図り、個別最適化の学びにつなげる。
- ④ 復習による学力の定着や自主学習による学習への興味関心を高めるなど家庭学習の意義や意味を周知し、学校・学年・学級と家庭が連携して児童の実態に応じた家庭学習の取り組みをさらに強化する。
- ⑤ グローバルに活躍する児童の育成の視点で、3Weekの取組をさらに充実させる。自他の文化理解とともに英語や日本語を使ったコミュニケーション能力の育成にも力を入れ、多様な人々と良好に関わることのできる力を育成する。

(2) 教師の資質向上を図る。

- ① 校内研究で「府中市グランドデザインの4つの視点を明確に位置づけた指導の在り方」をテーマに全教員で取り組み、各教科で授業力の向上を目指す。全教員が授業を日常的に公開し合い、互いを高め合う。

- ② 主任教諭を核とした組織的なO J Tを計画的に実施し、主任教諭が指導者となりミニ研修を定期的に行い、若手教員の育成を通して主任教諭自身の教師力の向上も図る。学級経営力、教科指導力、児童理解力など、全教員について教師力の向上を目指す。主幹教諭とO J T担当の主任教諭に進捗状況の管理をさせる。
 - ④ 自己申告を活用し、各自の授業改善の目標、方法を指導する。また、ワークライフバランスの意識を高め、自己の働き方の管理を計画的に行えるようにする。
 - ⑤ 3回の服務事故防止研修、職員会議や職員夕会を活用したミニ研修を行い、服務事故防止への教員の意識を向上させる。次年度以降も服務事故ゼロを目指す。
- (3) 人権感覚を高め、いじめの未然防止、早期解決を図る。
- ① 学年全体の担任であるという意識を全教員にもたせ、学年全体で児童の実態把握に努め、いじめ防止対策委員会などによる組織的な対応、スクールカウンセラーの活用、保護者との連携などにより、いじめの未然防止、早期解決に努める。
 - ② 人権尊重教育に計画的に取り組み、専門家を講師に招聘して児童及び教員の人権意識や人権感覚を高めるとともに、専門家によるいじめ防止の授業を実施する。
 - ③ 定期的実施する「心の天気」、ふれあい月間の児童アンケートや児童面談など、児童の思いや悩みをリサーチする機会を多くもち、課題の早期発見や早期対応につなげる。
- (4) 不登校の防止に努めるとともに、不登校児童、家庭への対応を充実させ、不登校児童を再登校に導く。また、個別に配慮を必要とする児童への指導を充実させる。
- ① 学年チームによる日常的な児童観察を行い、スクールカウンセラーや保護者との連携を強化する中で児童の心情や取り巻く環境を理解するように努め、問題の未然防止と早期発見・解決に向けて取り組んでいく。
 - ② 校内委員会での情報共有を徹底、特別支援教室担当教員、教育センター、けやき教室、みらい、はばたき、スクールソーシャルワーカーとの連携を図り、組織的に改善を促す。
 - ③ サポートルームの運営の充実、学級担任とサポートルーム担当支援員の連携を強化し、不登校や登校を渋る児童、教室に入れない児童の居場所の充実を図る。
 - ④ 保護者の支援体制を強化するために、関係機関（教育センター、巡回相談チーム、民生児童委員、みらい、はばたき、児童相談所、スクールソーシャルワーカー）との連絡を密にし、児童一人一人の状況把握に努めるとともに、保護者や家庭支援につなげる。
- (6) 基本的な生活習慣を定着させるとともに、他者への優しさ、思いやりを育成する。
- ① 「いつでも・どこでも・誰とでも・自分から」を挨拶の目標として掲げ、挨拶指導の充実を図る。PTAや自治会など保護者や地域と連携して、地域ぐるみであいさつの推進を図ることにより、防犯防災や児童の健全育成につなげる。
 - ② 安全指導の充実と避難訓練の工夫改善など安全教育の見直しを図り、児童の安全への意識を高め、災害時など児童が主体的に考え行動できる力の育成を目指す。
- (7) コミュニティスクールの推進
- ① 地域と連携した体験学習である「未来につながる府中2020レガシー」の「ふるさと学習」の取り組みを充実させ、地域で活躍されている方や地域の施設や環境を広

く知る機会をつくり、各学年で児童の意識をさらに高める。地域の一員としての自覚や地域を愛する心情をさらに深める。

② 地域行事への参加を積極的に児童に呼びかけ、地域とともに子供を育てる教育の推進を図る。

(8) 小中連携の推進

① 3校の教員が互いに学校訪問することにより小中の教員が交流して連携を図り、学びや育ちの視点での教育課題に対応する。今後、地域の課題やニーズに合った分科会構成を再設定し、より有意義な連携にする。分科会ごとの課題研究、研究協議をの充実を図る。

② 中学校教員の小学校出前授業やTT指導による専門性を生かした授業の実施など、小中学校の教員が連携・協働して児童生徒の指導に当たる機会をつくる。

③ 運動会の中学生による児童サポート、合唱部の小学校訪問や連合陸上記録会の陸上部による練習手伝いなど、児童生徒の直接交流を実現させる。